

# 現地法人と日本本社の役割

初代専任担当者に任命されて以来、22年間で学んだ経験とノウハウを伝え残したい。



住友重機械工業株式会社 人事本部  
人事マネジメント部 グローバル人事グループ 主管  
千原 丈

## 火曜日の晴天の朝

早いもので、すでに四半世紀が過ぎた。私が30代半ば、アメリカ・アトランタ駐在として全米を走り回っていた頃の話だ。

快晴の朝、顧客訪問のため車を走らせていた時、携帯電話が鳴った。自宅の妻が興奮した様子で「ニューヨークでビルに飛行機が衝突したみたい」「あっ、またビルに……。今、2機目が……。本当の話なの」と、ほとんど錯乱状態だった。これが、2001年9月11日、同時多発テロを知った瞬間である。



2001年9月11日、NYのワールドトレードセンターにハイジャックされた2機の飛行機が墜落 (AFP=時事)

ほどなく会社からも連絡が入り、顧客訪問をキャンセルして事務所へ戻ることになった。帰路、頭の中はかなり混乱していた。2機の飛行機が高層ビルに衝突した。単なる事故ではあるまい。この時点では、その後の世界を大きく変えるテロであるとは、想像すらしていなかった。

## まずは、安否確認を！

事務所に戻ると、ほぼ全員が電話中であり、呼び出し音が鳴り響いていた。ホワイトボードを使い、社員の安否確認を最優先にした。その間にも全米のフライトが次々とキャンセルされ、遠方にいる社員の帰宅手段の確保が課題となった。ホテルやレンタカーの予約延長などを指示し、安全な滞在先と移動手段の確保を徹底させた。全員無事であったが、レンタカーで2千キロ以上を運転して帰宅した社員もいた。

## フェイクニュース

当時は「フェイクニュース」という言葉すら存在していなかったが、人々を不安に陥れるデマや誤情報が氾濫するのは、大きな災害時によく見られる現象である。

事務所から南へ約30キロの位置に、CDC(アメリカ疾病予防管理センター)という感染症対策の総合研究機関がある。コロナ禍においてもウイルス解析やワクチン開発の中心となった機関であり、世界中の細菌やウイルスを保管している施設でもあるが、このCDCが次の攻撃目標になっているという情報が流布した。生物兵器級の病原体が大気中に拡散するという最悪のシナリオだった。

結果的には何事も起こらなかったが、当時は必死に風向きを調べ、避難ルートを確認するなどの対応を行った。それがフェイクニュースであったかどうかは、いまだに不明だ。